

わが故郷自慢：信州飯田 －天竜峡・水引工芸・元善光寺・りんご並木－

西区・武岡支部 松下 敏夫

ヒトは、故郷自慢をついついしたがるようで、私もご他聞に漏れない。時の経つのは早いもので、故郷信州飯田を離れてはや約70年、名古屋・熊本を経て鹿児島に定住して約40年経ってしまった。鹿児島へ来てから時々自己紹介をさせられた折に、「私は児童文学者の椋鳩十さんの中学の後輩で・・・」と話すと、「では、鹿児島のご出身ですか?」といわれたりする。そこで、「いや、椋さんは鹿児島県人と思っている人が多いようだけれど、実は長野県人で、旧制飯田中学の先輩です」と訂正し、ついでに、ついつい故郷飯田の自慢話をしたものである。

信州飯田というところ

飯田市は、日本の中央、長野県の最南端にあり、南信地方で唯一の人口10万人以上の市(県内の市で第4位)である。市街地は、標高約500m、東の3,000m級の南アルプスと西の中央アルプスの間の伊那谷に南北に流れる天竜川沿いに位置し、豊かな自然と優れた景観、四季の変化に富み、県内では最も温暖な気候に恵まれている。

因みに、市の木はりんご、市の花はミツバツツジである。

市街地は江戸時代に飯田藩の城下町として、また三州街道(塩の道)の宿場町として栄え、城下町の面影を残す町並みや保存されている伝統芸能の多さから「南信州の小京都」とも称されている。

主な交通は、JR飯田線は豊橋から特急で約3時間、中央道高速バスは名古屋まで約1時間半、中央高速バスは新宿まで約4時間である。

なお、2027年に東京・名古屋間に開通予定のリニア中央新幹線の長野県駅は、市内上郷

に設置予定だが、同級生とは、「われわれは、開通まで生きていって、乗ることができるかな?」と話している。

主な産業と観光地

産業は、近代以降に製材業(森林面積:全市域の約85%)や製糸業が興り、現在は、先端技術を導入した精密機械工業、電子、光学、ハイテク産業を始め、半生菓子、漬物、味噌、酒などの食品産業、市田柿、りんご、梨などの果物を中心とした農業などが盛んである。

観光地としては、奇岩・絶景が造る秘境の自然美で国の名勝に指定されている「天竜峡」があり、豪快な川下り(天竜舟下り)を楽しむことができる(写真1)。

冠婚葬祭などの飾りに用いられる「水引」は、平安時代からコウゾやミツマタの栽培と、それを原料にした和紙作りが盛んであった飯田市で、江戸時代に藩主が武士の内職として製造法を習わせたのが始まりといわれ、「飯田水引」の全国シェアは約7割といわれ、様々な工芸品の専門博物館もあり、素晴らしい作品を鑑賞することができる(写真2)。

南信州の古刹「元善光寺」(写真3)は、今



写真1 久し振りの天竜舟下り

から約1400年前、信州麻績の里（現在の飯田市座光寺）の住人本多善光公により「一光三尊阿弥陀如来」を祀る寺としてこの地に開かれたのが起源とされる。その後、阿弥陀如来のお告げにより本尊は芋井の里（現在の長野市）の善光寺に遷された。木彫りで同じ阿弥陀三尊は、ここ「元善光寺」に祭られており、「お告げ」で、善光寺と元善光寺の両方にお詣りしなければ「片詣り」といわれている。

ご利益は、家内繁盛・交通安全・商売繁盛・合格祈願で、初詣には約7万人の参拝者が訪れるという。

太平洋戦争後、美しい街の復興を願い中学生が管理して街のシンボルとなった「りんご並木」は、並木そのもののがおり風景100選に、並木通りは日本の道100選に選ばれている。5月の開花期には美しい花と香りで街は



写真2 飯田水引の作品



写真3 元善光寺

溢れ、収穫期には誰も盗んでいかないわわに実ったりんご並木が観光客の眼を楽しませてくれる。

南信州は、樹齢300年以上の一本桜の宝庫として有名で、県の天然記念物に指定されている美しい巨木の名桜が数多く残されている（写真4）。開花期には、県外からもバスツアーなどで多数の観光客が訪れ、見事な巨木の桜花を楽しんでいる。

南アルプス南部（聖岳・光岳・大沢岳など）の登山口にある「遠山郷」には、標高2,000mから南アルプスの大パノラマを楽しめる「しらびそ高原」を始め、日本の原風景が残る山里からにほんの里100選に入り、30度の急傾斜の狭い土地を耕作した畠の光景から「日本のチロル」と称される「下栗の里」や、日本初の隕石孔の「御池山クレーター」などがあり、湯立て神楽の古い形態を伝承して「千と千尋の神隠し」の原点となったといわれる「霜月祭り」が開催されている。

飯田市は人形劇の街としても知られ、市内では300余年の歴史をもつ人形浄瑠璃の黒田人形・今田人形の2つの人形芝居が活動を続いている。人形舞台機構を完備した日本で最も古く大きな舞台として内外に知られている「下黒田の舞台」（江戸時代・国重要有形民俗文化財）、黒田人形浄瑠璃伝承館、竹田扇之助記念国際糸操り人形館などがある。

また、市内には、2007年に開館したNHK人



写真4 桜丸御殿址のヒガンザクラ



写真5 川本喜八郎人形美術館

形劇「三国志」などでファンが多い人形美術家・川本喜八郎の人形美術館がある（写真5）。

さらに、1979年に第1回大会が開催された「人形劇カーニバル飯田」は、現在、毎年8月に開催されている「いいだ人形劇フェスタ」として継承され、10年に一度、「世界人形劇フェスティバル」も開催されている。

主な出身者

飯田市の主な出身者としては、江戸時代の儒学者・経世家の太宰春台や、岡倉天心の門下生で横山大觀らと共に明治期の日本画の革新に貢献した画家の菱田春草を始め、日本演劇学会初代会長で演劇学者の河竹繁俊があり、市内には次男の演劇学者の河竹登志夫による世阿弥の言葉「家 家にあらず 続くをもて家とす 人 人にあらず 知るをもて人とす」を記した碑がある（写真6）。

その他、詩人・英文学者の日夏耿之介や、日本法社会学会設立に貢献し、東京都公害研究所初代所長などを務めた法学者戒能通孝、ヤクルト開発者・創業者・医学者の代田稔などがある。

私の身近な人物では、中学・高校時代の山岳部の先輩に、ベトナム戦争などのルポルタージュ活動や新聞記者として知られる本多勝一が、同級生には、日本の地質学・近代古生態学の開拓者と評される鎮西清高、「柳田國男研究会」などを主宰し、日本の思想史学者と



写真6 世阿弥記念碑

評される後藤総一郎などがあり、鎮西とは、生物部や山岳部で共に楽しんだことが、後藤とは、口論や取っ組み合いの喧嘩をしたことが懐かしく思い出される。

食べ物あれこれ

飯田市は、焼肉店が多い街ランキングで日本一（人口1万人当たり）だそうである。「遠山郷」には、猪・鹿・熊肉など独自のジビエ文化がある。

現在はブランド品ともなっている市田柿、五平餅や、鯉の旨煮（甘煮）・鯉こくなどは、わが故郷の懐かしい味である。海産物が少ない山間部のこの地方では、現在、日本の珍味・健康食品ともなっている蜂の子・イナゴ・ザザ虫・ひび（蚕の蛹）などの佃煮は、太平洋戦争前後の食糧難時代に子供であった私たちは、貴重な蛋白源として、田んぼで苦労してイナゴとりなどして食べた記憶がある。

終わりに

「ふるさと観光大使」になったような気分で、ついつい筆が滑り過ぎたようなので、ここで止めたい。

この隨想をご覧いただいた方で中部地方を訪れる機会がある方には、できればわが故郷飯田の様々な観光スポットに立ち寄り、ユニークな食べ物などを大いに賞味していただければ幸いである。